

卒業・終了に際して

数学を基礎とした進路の形成

令和5年度修士課程修了 田中裕人

京都大学での6年間を通じて、私は様々な側面で成長することができたと感じています。私は最終的に生命保険会社に就職し、アクチュアリーとして学問と実務を繋ぐ役割を担っていくという選択をしました。しかしこれまでの学生時代の体験は、一般企業に就職された方だけでなく研究の道を進まれた方にも一定の共感を得られるものと思われまますので、学部時代と修士時代に分けて振り返ってみようと思います。

学部入学時、おおまかに数学全般に興味があり、また京大理学部の方野選択に関する自由さも相まって、ほとんど数学の講義だけで卒業する単位取得計画を立てていました。同期には数学に対する熱量が私と近い人もいれば、理解できないくらいのめり込んでいる人もいて、彼らの考え方やセンスから刺激を受けることも多々ありました。またSNSを通じて、入学直後にもかかわらず既に有名人のような同期とも交流ができ、数学に対する意欲は入学前に比べて格段に高くなっていたと思います。この頃は興味のある分野といったものもなく、意識していたのは優秀な同期から知識を吸収するために自主ゼミに参加することだけです。

2回生から3回生に上がる頃、3回生配当の解析・代数・幾何の講義に該当する自主ゼミや系登録を経験し、自分も含めて同期たちが専門とする分野が固まってきました。私が特に勉強したいと思ったのが解析学、その中の確率論です。この時点ではなぜ確率論に興味湧くのか、自分でもうまく表現できませんでしたが、専門の確率論の講義だけでなく保険数学など応用寄りの講義を受ける中で、純粋な数学の理論だけでなく数学以外の分野(経済や現実社会)とのつながりに興味に向いていきました。自分の興味が固まってくるとより集中して勉強できるというもので、このあたりから自分の専門性を高めるための努力がより捗るようになったと思います。ちなみに保険会社のアクチュアリーを目指した経緯は、ここまでの経験で固まってきた興味と、私のかかなりのリスク回避的な性格の相互作用によるものです。

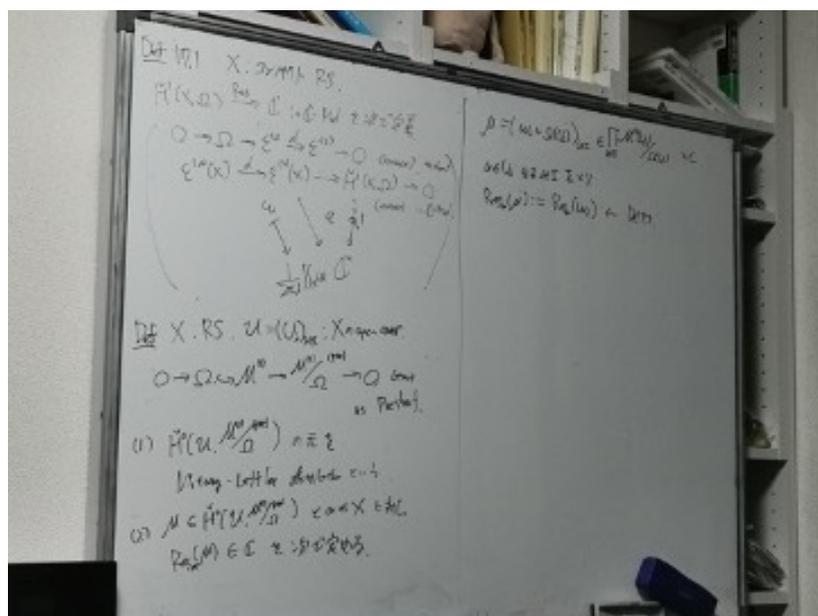
一方、同期との自主ゼミは学部卒業まで続いていました。私の周りには残念ながら解析学を専門とする人は少なく、自主ゼミの内容は代数や幾何寄りでしたが、様々な分野の解決したい問題とそのためになられた理論といった対応を知ることができ、非常に有意義な時間でした。今思い返せば、位相空間論など基礎的な分野を勉強していた頃から、専門によらず同期達との自主ゼミを通じて数学の面白さや発展性を共有できたことが、学部時代で最も価値のある体験だったかもしれません。

学部では自分の興味の範囲を狭めて専門性を高めることを第一としてきましたが、修士課程では逆に視野を広げることを優先するようになりました。これは、アクチュアリーを目指して保険数学ゼミに入り、志を同じくするゼミ同期たちと理論・実務・その間の諸問題を学ぶと同時に、就職活動というそれまで全く経験したことの無い戦いが始まったことがきっかけです。

研究と就職活動は全く異なる取り組みですが、どちらも自分を客観視する必要があるという点では共通していると感じました。私がこれまで勉強した数学が、私自身にどのような影響を与えてきたかについて考える機会が度々あり、具体的には私が確率論を面白いと感じる理由について考察することが多かったです。私の見解としては、確率論とは理論と現実の境に最も敏感である学問であり、その差は絶対に埋まらないためそれをどのように扱うかという点に魅力を感じていると気づいたのです。このような考察を経て、私の興味の対象が数学の理論だけではなく、自分がやりたいことを今後長くやっていくためには専門性だけでなく幅広い見識を身につける必要があることを学びました。

私は現在、アクチュアリーとして目的ごとに適切なモデル(≒理論)を立て、保険会社の様々な活動を評価するという業務を行っております。例えば保険会社の健全性を一定程度確保することが目的なら、(実際にできるかどうかは置いておいて)将来の経済環境の動向を完璧に当てるとする必要はありません。

これから数学を学ぶ学生が、その勉強の目的を見つけられることを願います。



自宅で自主ゼミを行う様子